

課題別分科会 第4分科会

指導助言者

渡瀬 典子 先生 岩手大学教育学部 准教授

川地 里美 先生 岩手県立総合教育センター 研修指導主事

家庭C 衣生活・住生活と自立

1. 研究部基調提案

県研究副部長 千 田 恵 (盛岡市立見前南中学校)

2. 実践発表

(1) 岩手地区 中 屋 明 子 (滝沢市立滝沢南中学校)

(2) 一関地区 小 岩 明 子 (一関市立桜町中学校)

家庭D 身近な消費生活と環境

1. 研究部基調提案

県研究副部長 久 慈 美 佳 (盛岡市立松園中学校)

2. 実践発表

(1) 釜石地区 堀 村 千鶴子 (釜石市立釜石中学校)

(2) 胆江地区 塩 飽 由美子 (奥州市立小山中学校)

第4分科会

C 衣生活・住生活と自立

D 身近な消費生活と環境

運営責任者	久慈美佳(盛岡・松園中)
司会者	久慈美佳(盛岡・松園中)
記録者	田中留美子(紫波・矢巾中)
参加者数	19名(高校の先生も3名含む)

1 はじめに

今年度は、昨年度に設定された研究主題と副題「学んだ知識・技術を活用し、よりよい生活を求めて実践する力を育む授業の研究—共に学ぶ活動を通して—」に迫るために、どのように研究を進めるべきかと、各地区や県研究班が手探りを始めた時である。

本分科会では、特に副題の「共に学ぶ活動を通して」という点で、展開のあり方を意識した発表がなされた。

2 発表の概要

(1) C 衣生活・住生活と自立

①基調提案

「共に学ぶ活動」が効果的に行われるために、「生徒の実態把握」「課題提示の工夫や資料提示の仕方」を授業実践に生かすことが必要と考えて研究を進めた。生徒の実態把握では住生活に関するアンケートを県内の9校で実施した。結果では、教師が想像するより多くの生徒が住まいに関する内容を実践している点や、地域で生活する上での悩みがあること等があげられた。これらを踏まえ、指導の在り方を考えた。その例として「住まいのはたらき」の展開例をあげ、二分前学習で岩手の住まいについてのプリントを読んでから授業に入る点や、授業の振り返りとして、自分の住んでいる地域を見つめる宿題を実践させるなど工夫した点があげられた。また、今年度の授業公開の花巻地区と連携して、東日本大震災で被災された方が住む仮設住宅を訪問インタビューし、その言葉を授業の中で取り上げたり、ペア学習で仮設住宅の間取りから考えさせるなど、「共に学ぶ活動を通して」という点を意識した発表であった。

②岩手地区

地区として部員での研究活動は厳しいが、今回

は、滝沢市の市教研と重ねて行った研究授業を中心に発表した。「布を用いた物の製作 ハーフパンツ 製作を取り入れた授業の研究」

1年生で採寸して発注、2年生で製作・文化祭展示、3年生で修学旅行のパジャマとして着用という流れで進めている。道具の扱いや基礎縫いは小学校では定着が厳しいため、その確認を授業に取り入れている。「三つ折り」に焦点をあて、「共に学ぶ活動を通して」思考の深化、修正につなげることができた。

③一関地区

平成26年度の東北大会に向けて約5年「食」と「家族」に重点をおき、今年度は「C衣生活と・住生活と自立」に目を向けてみた。

「まつり縫いの場面において共に学ぶ活動を取り入れた授業」ということで、教師示範後、生徒が縫ってみて「どうしたら上手に縫えるか」ということをみんなで話し合いする場面を取り入れた。一人では気づけなかった「まつり縫いのコツ」も、みんなで共有することができた。今後も、どの場面で共に学ぶ学習を取り入れると効果的か考え、研究を進めたい。示範ではDVDより、教師の示範の方が生徒に分かりやすかったようだ。

(2) D 身近な消費生活と環境

①基調提案

昨年度までは、「家庭生活と消費」について、授業実践やワークシートの改善等を行ってきた。今年度は「家庭生活と環境」に関わる内容について研究を進めることにした。まずは、副題に迫る授業展開をするため、班員が地域の公的機関で研修を行い、授業に生かす資料作成や今後の連携について模索している段階である。

盛岡市環境部「資源循環課」での研修で、ゴミ処理の方法・分別の仕方と現状について班員が研修

→「ゴミ減量」についての指導案が提示された。

また、「サステナブルクッキング」の授業実践例

も提示された。今回は、ゴミ処理の最新情報を得たり、行政との今後の連携を確認した充実した研修や、指導例の研究ができた。今後は更に、限られた時数の中で、魅力ある授業をどう構築していくかということである。また、年間の指導計画や評価のあり方についても検討したいと考えている。また、ゴミ問題は教師自身も悩むことも多く、どのように生徒に指導していくべきか、検討を重ねたい。

②釜石地区（堀村 千鶴子先生：釜石中）

地区7校中、家庭科免許所有者は2名であり、組織的に研究に取り組むのは難しい現状である。少人数ながらの実践交流を進め、授業を通してよりよい生活を求め実践する力を育てていきたい。

「D身近な消費生活と環境」と「B食生活と自立」「C衣生活と自立」の内容と関連づけて、よりよい消費生活を営むためには？と考えさせる授業展開例が3つあげられた。

1年→衣服表示調べから、衣服の計画的な活用と選択を考える

2年→加工食品の表示から、食品の情報と選択について考える

3年→1・2年の学習から、生活に必要な物資の選択・購入についてのまとめ学習

各学習の中で「共に学ぶ活動」を位置づけた。

③胆江地区（塩飽 由美子：小山中）

消費生活に関する事前アンケートを行い実態把握をした後に、消費者トラブルの防止や対処法の授業を行った例があげられた。ネットショッピングやオンラインゲームの事例をたくさんあげ、生徒が身近に考えられるように工夫していた。

3 討議の内容

(1) 質疑応答（一人一言、意見や日頃の悩みを）

(司) 問題解決能力を育てるような授業をつかっていくには、私たちはどんな工夫を？生徒の実態・問題点をあげながらご意見等を。

- ・家庭にIHが普及でガス台使用が危うい。
- ・生徒が生活で何が出来ないかわからない。
- ・調理実習・ミシンは3学年通して取り入れる方が上達を実感できる。
- ・生徒が変わっているのに、私たちが遅れてはならない。新聞など日々情報を得たい。

(司) どのような題材を使っているか？

- ・高校でもエプロンをやるからとエプロン製作をやめた所があるが、この教材で指導する良さもある
- ・黒板に「1時間の流れ」を提示するのは効果的。
- ・親も多忙で生活にかかる時間が少ない・・・そんな子どもたちに何を教えるべきか。

- ・中高連携→中学校の題材を事前調査して題材選択
- ・本物に触れさせることを大事にしている。保育園や住宅メーカーとの連携。

- ・ミシン使用→糸かけゲームなど取り入れている。
 - ・夏休みの宿題雑巾3枚、冬は2枚→上達している
- (2) 助言

○渡瀬 典子先生（岩大教育学部准教授）

- ・実態把握できた→では今後どんな力をつけたいか
- ・いい目を育てる→選択・消費
- ・表示でもグローバル化、来月から洗濯表示変更
- ・消費者トラブル、岩手県でも1万件以上。例えば「お試しと言い、実は契約を結ばせる」など。
- ・今後、具体的にどのように題材化していくか楽しみである。

○川地 里美先生（総合教育センター研修指導主事）

- ・小中はこのような研究交流をしているが高校はない。今日は高校の先生も参加。繋げたい。
- ・「共に学ぶ」ということはどのようなことか？例えば、ゲストTに来て頂いても、生徒に身につけたいことを焦点化しないと・・・あれ？となる
- ・小学校では担任が家庭科も担当の場合が多い。専科教員として、どんな力をつけさせたいか考える。
- ・宿題の出し方を精査する。
- ・機器があればよしではなく、活用方法を工夫。例えば示範用の布も吟味する。
- ・実生活は10年ひと昔より短いスパンで変わる。

4 研究の成果と課題

県の研究主題と副題が新たに提案されてから最初の県大会ということで、大変有意義な研究会となった。まずは、基調提案や地区の実践発表において、副題「共に学ぶ活動を通して」に迫るための具体的な授業展開例が多数あげられたことは、今後の研究の糸口となった。また、高校の先生の参加により、小中高の連携を図ることの必要性も強く感じた。

目まぐるしく変化する世の中や生徒の実態を把握しつつ、学びから実践へと、生徒にたくましく生活できる力を育てるために、今後も互いに研究交流を進めたい。